

植野浩三先生のご退職にあたって

奈良大学の文化財学科で40年にわたって調査研究・学生指導をされてこられた植野浩三先生が、定年退職されることになりました。日々ご指導いただき、また共に文化財学科の発展、学生の指導にあたってきた文化財学科教員一同を代表しまして御礼申し上げます。

植野先生は、広島県生まれで、学生時代から歴史に興味があったと伺っています。そして、1974年に奈良大学文学部史学科に入学。当時、奈良大学に赴任してきたばかりの田辺昭三先生のもと、多くの発掘調査に参加されました。卒業論文も田辺先生の指導のもと、初期須恵器をテーマにしたものと聞いています。この時からはじめた須恵器研究が、植野先生のライフワークになりました。卒業後、奈良大学に再び戻って来られたのは1980年のことです。前年に、日本ではじめて設置された文化財学科の助手として招かれたそうです。それから40年、考古学・博物館学の教員として、文化財学科の発展に尽力を尽くされてきました。

植野先生の教員生活において、大きな功績を二つあげるならば、多くの学生を育てたことと、初期須恵器研究を大きく進められたことでしょう。

先生は、文化財学科で考古学実習などを学生に教え、さらに各地で多くの発掘調査を学生と共に行ってきました。合宿形式で行われたその調査では、発掘の技術や経験を得るだけではなく、教員と学生、学生と学生など、多くの出会いをもたらし、そこから一生付き合える仲間意識が芽生えたのです。これは何物にも代えがたい宝となったことでしょう。このような経験を学生たちにも体験させて、指導してきたのです。

また、先生の研究テーマは初期須恵器でした。この研究は40年を経ても、未だ研究途上とおっしゃっています。新たな資料は次々と発見され、また資料調査によっても、新たな発見（気づき）があると聞きます。その研究過程において、韓国へ目を向けるようになったのも、当然のことだったのでしょう。2008年には一年間、韓国在外研修として留学され、日韓窯業生産比較研究を進められるとともに、韓国の多くの友人と交流されました。

このように、学生指導や研究において、多くの学生や友人たちと交流されたことが、大切な宝であるとおっしゃっています。

私と植野先生の出会いは、私が奈良大学に入学した時でした。この時すでに、先生は奈良大学で教鞭を執られており、考古学実習で土器の実測を教えてくださいたいことを覚えています。当時は親しみを込めて「植ちゃん」と、学生たちはこっそり呼んでいました。また、宝来校舎のテニスコートで、泉拓良先生と二人でテニスをしている姿もよく見かけました。今、こうして研究室を並べて、学生指導をすることになるとは、当時は夢にも思いませんでした。退職後も、まだ多忙な日々が続くと思いますが、これからも須恵器研究に邁進され、時々私たちを叱咤激励、相談にものっていただけるようお願いいたします。

2021年3月吉日

相原嘉之